溺れかけた兄妹

有島武郎

土用波(どようなみ)という高い波が風もないのに海岸に打寄(うちよ)せる頃(ころ)になると、海水浴に来(き)ている都(みやこ)の人たちも段々別荘をしめて帰ってゆくようになります。今までは海岸の砂の上にも水の中にも、朝から晩まで、沢山の人が集って来て、砂山からでも見ていると、あんなに大勢な人間が一たい何所(どこ)から出て来たのだろうと不思議に思えるほどですが、九月にはいってから三日目になるその日には、見わたすかぎり砂浜の何所にも人っ子一人いませんでした。

私(わたし)の友達のMと私と妹とはお名残だといって海水浴にゆくことにしました。お婆様(ばあさま)が波が荒くなって来

るから行(ゆ)かない方がよくはないかと仰有(おっしゃ)ったのですけれども、こんなにお天気はいいし、風はなしするから大丈夫だといって仰有ることを聞かずに出かけました。

丁度昼少し過ぎで、上天気で、空には雲一つありませんでした。昼間でも草の中にはもう虫の音(ね)がしていましたが、それでも砂は熱くって、裸足(はだし)だと時々草の上に駈(か)け上(あが)らなければいられないほどでした。Mはタオルを頭からかぶってどんどん飛んで行きました。私は麦稈帽子(むぎわらぼうし)を被(かぶ)った妹の手を引いてあとから駈けました。少しでも早く海の中につかりたいので三人は気息(いき)を切って急いだのです。

紆波（うねり）といいますね、その波がうっていました。ちゃぷりちゃぷりと小さな波が波打際（なみうちぎわ）でくだけるのではなく、少し沖の方に細長い小山のような波が出来て、それが陸の方を向いて段々押寄（おしよ）せて来ると、やがてその小山のてっぺんが尖（とが）って来て、ざぶりと大きな音をたてて一度に崩れかかるのです。そうすると暫（しば）らく間（ま）をおいてまたあとの波が小山のように打寄（うちよ）せて来ます。そして崩れた波はひどい勢いで砂の上に這（は）い上（あが）って、そこら中（じゅう）を白い泡で敷きつめたようにしてしまうのです。三人はそうした波の様子を見ると少し気味悪くも思いました。けれども折角（せっかく）そこまで来ていながら、

そのまま引返(ひきかえ)すのはどうしてもいやでした。で、妹に帽子を脱(ぬ)がせて、それを砂の上に仰向(あおむ)けにおいて、衣物(きもの)やタオルをその中に丸めこむと私たち三人は手をつなぎ合せて水の中にはいってゆきました。

「ひきがしどいね」

とMがいいました。本当にその通りでした。ひきとは水が沖の方に退(ひ)いて行く時の力のことです。それがその日は大変強いように私たちは思ったのです。踝(くるぶし)くらいまでより水の来ない所に立っていても、その水が退いてゆく時にはまるで急な河の流れのようで、足の下の砂がどんどん掘れるものですから、うっかりし

ていると倒れそうになる位でした。その水の沖の方に動くのを見ていると眼（め）がふらふらしました。けれどもそれが私たちには面白くってならなかったのです。足の裏をくすむるように砂が掘れて足がどんどん深く埋（うず）まってゆくのがこの上なく面白かったのです。三人は手をつないだまま少しずつ深い方にはいってゆきました。沖の方を向いて立っていると、膝（ひざ）の所で足がくの字に曲りそうになります。陸の方を向いていると向脛（むこうずね）にあたる水が痛い位でした。両足を揃（そろ）えて真直（まっすぐ）に立ったままどっちにも倒れないのを勝（かち）にして見たり、片足で立ちっこをして見たりして、三人は面白がって

人魚のように跳ね廻りました。

その中にMが膝位の深さの所まで行って見ました。そうすると紆波が来る度ごとにMは脊延びをしなければならないほどでした。それがまた面白そうなので私たちも段々深味に進んでゆきました。そして私たちはとうとう波のない時には腰位まで水につかるほどの深味に出てしまいました。そこまで行くと波が来たらただ立っていたままでは追付きません。どうしてもふわりと浮き上らなければ水を呑ませられてしまうのです。

ふわりと浮上ると私たちは大変高い所に来たように思いました。波が行ってしまうので地面に足をつける

と海岸の方を見ても海岸は見えずに波の脊中だけが見えるのでした。その中にその波がざぶんとくだけます。波打際が一面に白くなって、いきなり砂山や妹の帽子などが手に取るように見えます。それがまたこの上なく面白かったのです。私たち三人は土用波があぶないということも何も忘れてしまって波越しの遊びを続けさまにやっていました。

「あら大きな波が来てよ」

と沖の方を見ていた妹が少し怖そうな声でこういきなりいいましたので、私たちも思わずその方を見ると、妹の言葉通りに、これまでのとはかけはなれて大きな

波が、両手をひろげるような恰好で押寄せて来るのでした。泳ぎの上手なMも少し気味悪そうに陸の方を向いていくらかでも浅い所まで遁げようとした位でした。私たちはいうまでもありません。腰から上をのめるように前に出して、両手をまたその前に突出して泳ぐような恰好をしながら歩こうとしたのですが、何しろひきがひどいので、足を上げることも前にやることも思うようには出来ません。私たちはまるで夢の中で怖い奴に追いかけられている時のような気がしました。

後から押寄せて来る波は私たちが浅い所まで行くのを待っていてはくれません。見る見る大きく近く

なって来て、そのてっぺんにはちらりちらりと白い泡がくだけ始めました。Mは後(うしろ)から大声をあげて、

「そんなにそっちへ行くと駄目だよ、波がくだけると捲(ま)きこまれるよ。今の中(うち)に波を越す方がいいよ」

といいました。そういわれればそうです。私と妹とは立止(たちどま)って仕方なく波の来るのを待っていました。高い波が屏風(びょうぶ)を立てつらねたように押寄せて来ました。私たち三人は丁度具合よくくだけない中に波の脊を越すことが出来ました。私たちは体をもまれるように感じながらもうまくその大波をやりすごすことだけは出来たのでした。三人はようやく安心して泳ぎながら顔

を見合せてにここにこしました。そして波が行ってしまうと三人ながら泳ぎをやめてもとのように底の砂の上に立とうとしました。

ところがどうでしょう、私たちは泳ぎをやめると一しょに、三人ながらずぼりと水の中に潜(くぐ)ってしまいました。水の中に潜っても足は砂にはつかないのです。私たちは驚きました。慌(あわ)てました。そして一生懸命にめんかきをして、ようやく水の上に顔だけ出すことが出来ました。その時私たち三人が互(たがい)に見合せた眼といったら、顔といったらありません。顔は真青(まっさお)でした。眼は飛び出しそうに見開いていました。今の波一つで

どこか深い所に流されたのだということを私たちはいい合わさないでも知ることが出来たのです。いい合わさないでも私たちは陸の方を眼がけて泳げるだけ泳がなければならないということがわかったのです。

三人は黙ったままで体を横にして泳ぎはじめました。けれども私たちにどれほどの力があったかを考えて見て下さい。Ｍは十四でした。私は十三でした。妹は十一でした。Ｍは毎年学校の水泳部に行っていたので、とにかくあたり前に泳ぐことを知っていましたが、私は横のし泳ぎを少しと、水の上に仰向けに浮くことを覚えたばかりですし、妹はようやく板を離れて二、三

間（げん）泳ぐことが出来るだけなのです。

御覧（ごらん）なさい私たちは見る見る沖の方へ沖の方へと流されているのです。私は頭を半分水の中につけて横のしでおよぎながら時々頭を上げて見ると、その度ごとに妹は沖の方へと私から離れてゆき、友達のMはまた岸の方へと私から離れて行って、暫（しば）らくの後（のち）には三人はようやく声がとどく位（ぐらい）お互（たがい）に離ればなれになってしまいました。そして波が来るたんびに私は妹を見失ったりMを見失ったりしました。私の顔が見えると妹は後（うしろ）の方からあらん限りの声をしぼって

「兄さん来てよ……もう沈む……苦しい」

と呼びかけるのです。実際妹は鼻の所位まで水に沈みながら声を出そうとするのですから、その度ごとに水を呑むと見えて真蒼な苦しそうな顔をして私を睨みつけるように見えます。私も前に泳ぎながら心は後にばかり引かれました。幾度も妹のいる方へ泳いで行こうかと思いました。けれども私は悪い人間だったと見えて、こうなると自分の命が助かりたかったのです。妹の所へ行けば、二人とも一緒に沖に流されて命がないのは知れ切っていました。私はそれが恐ろしかったのです。何しろ早く岸について漁夫にでも助けに行ってもらう外はないと思いました。今から思うと

それはずるい考えだったようです。

でもとにかくそう思うと私はもう後(うしろ)も向かずに無我夢中で岸の方を向いて泳ぎ出しました。力が無くなりそうになると仰向(あおむけ)に水の上に臥(ね)て暫(しば)らく気息(いき)をつきました。それでも岸は少しずつ近づいて来るようでした。一生懸命に……一生懸命に……、そして立泳(たちおよ)ぎのようになって足を砂につけて見ようとしたら、またずぶりと頭まで潜(くぐ)ってしまいました。私は慌(あわ)てました。そしてまた一生懸命で泳ぎ出しました。

立って見たら水が膝(ひざ)の所位しかない所まで泳いで来ていたのはそれからよほどたってのことでした。ほっ

と安心したと思うと、もう夢中で私は泣声（なきごえ）を立てながら、

「助けてくれえ」

といって砂浜を気狂（きちが）いのように駈（か）けずり廻（まわ）りました。見るとMは遥（はる）かむこうの方で私と同じようなことをしています。私は駈けずりまわりながらも妹の方を見ることを忘れはしませんでした。波打際から随分遠い所に、波に隠れたり現われたりして、可哀（かあい）そうな妹の頭だけが見えていました。

浜には船もいません、漁夫（りょうし）もいません。その時になって私はまた水の中に飛び込んで行きたいような心

持ちになりました。大事な妹を置きっぱなしにして来たのがたまらなく悲しくなりました。

その時Mが遥かむこうから一人の若い男の袖(そで)を引(ひっ)ぱってこっちに走って来ました。私はそれを見ると何もかも忘れてそっちの方に駈け出しました。若い男というのは、土地の者ではありましょうが、漁夫とも見えないような通りがかりの人で、肩に何か担(にな)っていました。

「早く……早く行って助けて下さい……あすこだ、あすこだ」

私は、涙を流し放題に流して、地(じ)だんだをふまない

ばかりにせき立てて、震える手をのばして妹の頭がちょっぴり水の上に浮んでいる方を指しました。

若い男は私の指す方を見定めていましたが、やがて手早く担っていたものを砂の上に卸し、帯をくるくると解いて、衣物を一緒にその上におくと、ざぶりと波を切って海の中にはいって行ってくれました。

私はぶるぶる震えて泣きながら、両手の指をそろえて口の中へ押こんで、それをぎゅっと歯でかみしめながら、その男がどんどん沖の方に遠ざかって行くのを見送りました。私の足がどんな所に立っているのだか、寒いのだか、暑いのだか、すこしも私には分りません。

手足があるのだかないのだかそれも分りませんでした。抜手(ぬきて)を切って行く若者の頭も段々小さくなりまして、妹との距(へだ)たりが見る見る近よって行きました。若者の身のまわりには白い泡がきらきらと光って、水を切った手が濡(ぬ)れたまま飛魚(とびうお)が飛ぶように海の上に現われたり隠れたりします。私はそんなことを一生懸命に見つめていました。

とうとう若者の頭と妹の頭とが一つになりました。私は思わず指を口の中から放して、声を立てながら水の中にはいってゆきました。けれども二人がこっちに来るののおそいことおそいこと。私はまた何(なん)の訳もな

く砂の方に飛び上りました。そしてまた海の中にはいって行きました。如何(どう)してもじっとして待っていることが出来ないのです。

妹の頭は幾度(いくど)も水の中に沈みました。時には沈み切りに沈んだのかと思うほど長く現われて来ませんでした。若者も如何かすると水の上には見えなくなりました。そうかと思うと、ぽこんと跳(は)ね上るように高く水の上に現われ出ました。何んだか曲泳(きょくおよ)ぎでもしているのではないかと思われるほどでした。それでもそんなことをしている中(うち)に、二人は段々岸近くなって来て、とうとうその顔までがはっきり見える位になりました。

が、そこいらは打寄せる波が崩れるところなので、二人はもろともに幾度も白い泡の渦巻（うずまき）の中に姿を隠しました。やがて若者は這（は）うようにして波打際にたどりつきました。妹はそんな浅みに来ても若者におぶさりかかっていました。私は有頂天（うちょうてん）になってそこまで飛んで行きました。

　飛んで行って見て驚いたのは若者の姿でした。せわしく深く気息（いき）をついて、体はつかれ切ったようにゆるんでへたへたになっていました。妹は私が近づいたのを見ると夢中で飛んで来ましたがふっと思いかえしたように私をよけて砂山の方を向いて駈け出しました。

その時私は妹が私を恨（うら）んでいるのだなと気がついて、それは無理のないことだと思うと、この上なく淋（さび）しい気持ちになりました。

それにしても友達のMは何所（どこ）に行ってしまったのだろうと思って、私は若者のそばに立ちながらあたりを見廻すと、遥かな砂山の所をお婆様（ばあさま）を助けながら駈け下りて来るのでした。妹は早くもそれを見付けてそっちに行こうとしているのだとわかりました。

それで私は少し安心して、若者の肩に手をかけて何かいおうとすると、若者はうるさそうに私の手を払いのけて、水の寄せたり引いたりする所に坐（すわ）りこんだま

ま、いやな顔をして胸のあたりを撫でまわしています。私は何んだか言葉をかけるのさえためらわれて黙ったまま突立っていました。

「まああなたがこの子を助けて下さいましたんですね。お礼の申しようも御座んせん」

すぐそばで気息せき切ってしみじみといわれるお婆様の声を私は聞きました。妹は頭からずぶ濡れになったままで泣きじゃくりをしながらお婆様にぴったり抱かれていました。

　私たち三人は濡れたままで、衣物やタオルを小脇に抱えてお婆様と一緒に家の方に帰りました。若者はよ

うやく立上って体を拭いて行ってしまおうとするのをお婆様がたって頼んだので、黙ったまま私たちのあとから跟いて来ました。

家に着くともう妹のために床がとってありました。妹は寝衣に着かえて臥かしつけられると、まるで夢中になってしまって、熱を出して木の葉のようにふるえ始めました。お婆様は気丈な方で甲斐々々しく世話をすますと、若者に向って心の底からお礼をいわれました。若者は挨拶の言葉も得いわないような人で、唯黙ってうなずいてばかりいました。お婆様はようやくのことでその人の住っている所だけを聞き出すことが

出来ました。若者は麦湯を飲みながら、妹の方を心配そうに見てお辞儀を二、三度して帰って行ってしまいました。

「Mさんが駈けこんで来なすって、お前たちのことをいいなすった時には、私は眼がくらむようだったよ。おとうさんやお母さんから頼まれていて、お前たちが死にでもしたら、私は生きてはいられないから一緒に死ぬつもりであの砂山をお前、Mさんより早く駈け上りました。でもあの人が通り合せたお蔭で助かりはしたもののこわいことだったねえ、もうもう気をつけておくれでないとほんに困りますよ」

お婆様はやがてきっとなって私を前にすえてこう仰有いました。日頃はやさしいお婆様でしたが、その時の言葉には私は身も心もすくんでしまいました。少しの間でも自分一人が助かりたいと思った私は、心の中をそこら中から針でつかれるようでした。私は泣くにも泣かれないでかたくなったままこちんとお婆様の前に下を向いて坐りつづけていました。しんしんと暑い日が縁の向うの砂に照りつけていました。

若者の所へはお婆様が自分で御礼に行かれました。そして何か御礼の心でお婆様が持って行かれたものをその人は何んといっても受取らなかったそうです。

それから五、六年の間はその若者のいる所は知れていましたが、今は何処にどうしているのかわかりません。私たちのいいお婆様はもうこの世にはおいでになりません。私の友達のＭは妙なことから人に殺されて死んでしまいました。妹と私ばかりが今でも生き残っています。その時の話を妹にするたんびに、あの時ばかりは兄さんを心から恨めしく思ったと妹はいつでもいいます。波が高まると妹の姿が見えなくなったその時の事を思うと、今でも私の胸は動悸がして、空恐ろしい気持ちになります。

底本：「一房の葡萄　他四篇」岩波文庫、岩波書店
１９８８（昭和63）年12月16日改版第1刷
親本：「一房の葡萄」叢文閣
１９２２（大正11）年６月
初出：「婦人公論」
１９２１（大正10）年７月
入力：鈴木厚司
校正：地田尚
１９９９年９月27日公開
２００５年11月18日修正
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。